

日本小児感染症学会若手会員研修会第6回瀬戸内セミナー

ジュニアチューターを経験して

庄 司 貴 代*

感染症医を志す若い小児科医から相談を受けることが増えてきました。嬉しい半面、このままでは感染症医は将来消えゆく職業だろうといわざるを得ません。耐性菌の増加で抗菌薬が効かなくなれば、細菌感染症治療は外科治療が主体となり、武器がない感染症医は必要とされません。

自施設では、直接レジデントに小児感染症診療と抗菌薬適正使用をベッドサイドで教育でき、他診療科には広域抗菌薬以外の安全な代替案を提示できます。しかし、他施設では実際にみていないため、患者の安全を担保する提案が難しくなります。自施設以外での適正使用に限界を感じていました。

そんな焦りから、グループEでは抗菌薬の適正使用についてとりあげました。メンバーは耐性菌増加の問題を主体的に捉えていました。自分の施設は抗菌薬適正使用ができていないのか？ いないのか？ 小児感染症専門医が不在の自施設でどこ

から着手するべきか？ 院内で一緒に取り組む仲間は誰か？ 同僚や他科医師の処方行動を変容できるようにするには？ などと、実現可能なことに焦点を絞って議論を進めていきました。実際に静岡県立こども病院の抗菌薬適正使用チームを視察し、小児感染症学会のセミナーやメーリングリストで自施設での進捗状況を報告してくれます。夏季セミナーは参加者の意欲が高く、後続育成に大きな手応えを感じるものでした。メンバーは他施設で志を同じくする仲間を得て、お互いに支えとなっています。

ようやく来年4月に薬剤耐性菌対策のためのアジア太平洋地域で閣僚級会合が開かれることになり、国としての対策が始まりました（2015年11月現在）。将来の子どもたちに抗菌薬を残すために、抗菌薬適正使用のアクションを起こす小児医を一人でも増やしたいと思います。

* * *

* 静岡県立こども病院総合診療科/小児感染症科